

全教神協広報

第一二二号

全国教育関係神職協議会

〒151-0053

東京都渋谷区代々木1-1-1

神社本庁内

電話 〇三三三三三九八〇二一

FAX 〇三三三三三九八二九九

題字 諏訪秀一氏

国難を超えた先にあるもの

全国教育関係神職協議会会長 寶來 扶佐子



令和という新しい御世を迎えて、早四年。元年の暮れに勃発したコロナ禍に日々戦々恐々して月日が流れている感じがします。色々な所に掛付け、大声で語り合い、笑ったり唄ったり、楽しい会食や文化や芸術に触れる喜びなど、この様な当たり前の生活が出来なくなるなど予想だにしませんでした。しかし私の両親や祖父母の時代、激動の昭和、敗戦後の復興日本を経験した世代もそれなりの世相を体験した事と思います。し

かし姿の見えないコロナ禍という恐怖を除くと、日本では、日常の新聞やテレビも普通に日々の世界を報じています。世界に目を向けるとどうでしょうか？ この混沌の機に乗じて不穏な事が各地で起こっておりまして。ウクライナにおけるロシアの侵攻。新疆ウイグルにおける中国の人權と人種弾圧。北朝鮮による異常なまでのミサイルによる威嚇。台湾情勢の先行き不安。本当に終息したのかアフガン問題。数え上げればきりが無いこれらの問題を世界はコロナ禍と同時に対面しています。日本は島国であるが故に、隣接する外国に対する緊張感が稀薄過ぎるとも感じられます。今この時間にも、国や国民性を蹂躪される緊張感の中で戦っている人々がいます。日本の若者達

は、コロナ禍を恐れながらも、サッカーのワールドカップの為に集まって騒いでいる者もいます。今を刹那的に生きているようにも思えます。そんな若者達ばかりでは無い事を信じてはいますが・・・。

私が小学校の一年生になる時、父が話してくれた物語が何故か今も心に残っています。父は、私の奉職するお宮の先代宮司でした。当時はまだ祖父も健在で禰宜として奉職しながら、大阪の某学校で教鞭を執って、まさに教育関係神職の一員でもありました。その物語は、『最後の授業』です。フランスの子供達の学校が、占領下となり自国の言葉を使えなくなり、最後の授業を先生が行う、という内容でした。自国の言語や文化を語れない事が、如何ほどの悲しみであり、屈辱であることか・・・。

父の話術は巧みで、色々な物語や、映画の解説などしてくれましたが、何故かこの物語は、いまだにしっかりと私の幼い頃の記憶の中に残っております。「日本語の美しさや、日本の文化はきちんと守って大事にしないさい」、外地の戦場で敗戦を経験した父にとつて、これからの日本を憂えていたに違いないと思います。日本の伝統芸能や、文化に数多く触れる事が出来たのもこの家庭環境だったからだと思います。

教育はどうあるべきか？ 全ての人間にとつて、知識を得る事が必要である事は言うまでもありませんが、それだけでは十分とは云えない事は自明の理です。ある国、ある地域の人として生きていく事は、その地の文化や風習、道徳観や倫理観をも兼ね備える事でこそ達成出来ると考えます。こうした事は、教育現場や教師だけで出来る事ではありません。長い人生の中で、親や親族の後ろ姿を見つめ、教師達と正面から向き合い、学びながら感性も磨かれていくのでしょうか。

コロナ禍によつて、様々な行動の制限が生まれました。ウェブの会議や、書面での決済などの駆使により、静かに孤独を感じる時間も増えたはずですが、読書や趣味に没頭出来る時間が生まれたと感じる事も出来るでしょう。こんな時こそ、自分磨きをしましょう。私達の教育現場で、実践しましょう。地域に密着した私達教神協の会員こそふさわしい教化が可能だと思えます。

私達全教神協の会員は、教育現場で生き且つ神職としてその日本人の根源としての精神を基盤とした確固とした気概を保持した理念を持っていると自認しています。疲弊したコロナ禍の社会に、日本の心と秩序を取り戻すべく布石を打つのです。今この危機を好機とすべく共に動きましょう。令和五年の福島大会での集合を楽しみにしております。